

比較植民地教育研究の対象と方法

——E. P. Tsurumi の批判的検討のための視点をめぐって——

磯田 一雄

1. はじめに：呉成哲による先行研究批判と提言
2. 先行研究としての E.P.Tsurumi の業績
3. 呉成哲によるツルミ批判の論理
 - 3-1. 「成功」「失敗」の対比を嫌う
 - 3-2. 「単純すぎる二分法的対比」批判
 - 3-3. 初等教育に焦点化した植民地教育史観
 - 3-4. 初等教育の拡大——台湾と朝鮮ではどちらが普及したか
4. 日本語教育の「成果」はどちらで上がったか
5. 日本文化受容の一指標としての日本語文芸活動
6. 残された課題

キーワード：二分法的対比、パトリシア・ツルミ (E.P.Tsurumi)、植民地教育の成功と失敗、日本文化の受容 (日本化)、近代化

1. はじめに：呉成哲による先行研究批判と提言

日本の植民地教育史の研究は、宗主国であった日本での研究はもちろん、植民地であった中国、朝鮮、台湾でも行われている。しかしそれ

らはおおむね一国ないし一地域における研究に限定されており、二つ以上の地域を比較研究した例はまだ多くないと思われる⁽¹⁾。植民地教育全般にわたる本格的な比較研究としては、短いものではあるが、管見の限りでは台湾と朝鮮を比較したツルミの1984年の論文「朝鮮と台湾における植民地教育」(E. Patricia Tsurumi, *Colonial Education in Korea and Taiwan*、詳細後述)がその嚆矢であろう。

2005年4月24-25日、台湾師範大学で「日治時期初等教育国際学術研討会」という国際シンポジウム（以下「台湾師大シンポジウム」と略称）が開かれた。主として台湾の研究者（台湾に在住する日本人1人を含む）による公学校教育に関する報告が中心だったが、日本から参加した2人と、韓国から参加した1人は、ともに朝鮮の初等教育に関する報告をしている⁽²⁾。中でも、韓国清州教育大学(当時)の呉成哲による報告「植民地朝鮮における初等教育の拡大過程——台湾との比較研究のための一試論」は、このシンポジウムで植民地教育の比較研究をめざした唯一の報告だったのみならず、台湾にお

(1)台湾・朝鮮・満洲を含めての総合的な研究としては、駒込武『植民地帝国日本の文化統合』(岩波書店、1996年)を先ず挙げるべきだろう。特定の教科領域に限れば、筆者は朝鮮・台湾・満洲及び満洲国の歴史教科書の比較研究をしたことがある(『「皇国の姿」を追って』(皓星社、1999年)。また日本語教育の分野では、石剛『植民地支配と日本語——台湾・満洲・大陸占領地における言語政策——』(三元社、初版1993年)と、

徐敏民『戦前中国における日本語教育——台湾・満洲・大陸での展開と変容に関する比較考察——』(エムティ出版、1996年)は、一応比較研究であるが、ともに中国文化圏のみ扱って朝鮮が抜けており、本格的な比較研究とは言いがたい。

(2)『台湾教育史研究会通訊』第三十八期、2005年4月の「会議訊息」による。なおゲストとしてロナルド・ドーアが記念講演をしている。

ける日本の植民地教育に関する先行研究の批判的検討や、解放後の韓国教育に残存する植民地性の検討を含んでおり、きわめて意欲的な試みと言えよう。

台湾師大シンポジウムでの呉成哲報告「植民地朝鮮における初等教育の拡大過程——台湾との比較研究のための一試論——」の内容は以下のようなものである。

1. 序論
2. 近代教育と植民地教育の角逐：1905-1910
3. 初等教育の拡大過程：1911-1945
4. 朝鮮人の教育行為と総督府の拡大政策
5. 朝鮮と台湾の初等教育拡大の比較
6. 結論

呉成哲はこの報告で、近代朝鮮における民族主義者やキリスト教宣教師による「近代教育」と総監府・朝鮮総督府による「植民地教育」を対比し、初等教育の拡張過程における朝鮮人の「主体的教育行為」と、台湾の場合との類似性を論じながら、朝鮮の植民地教育と台湾の植民地教育を比較した先のツルミの論文を「単純すぎる二分法的対比に終始」しており、台湾の日本化について「証拠」を確実に提示していないと批判しているのは注目に値する⁽³⁾。

筆者はたまたま呉成哲の著書『植民地初等教育の形成』（原文ハングル、2000年）を拙論で考察している⁽⁴⁾。またこれまで二度にわたり、

この種の国際シンポジウムで報告者として、あるいは司会者として呉成哲と同席したことがある。これらシンポジウムでの呉の報告はいずれも上の著書の内容と関係の深いものであったし、特にソウルのシンポジウムでは、今回と同じくツルミにも言及している⁽⁵⁾。

そこでこれらの報告との関連も踏まえながら、今回の台湾師大シンポジウムでの呉報告の内容を、ツルミ批判を中心に検討してみたいと思う。ツルミ批判は彼の報告論文全体にかかわりがあると同時に、日本の植民地教育の比較研究において最初に検討すべき課題であると思われるからである。

2. 先行研究としての E.P.ツルミの業績

2000年のソウル・シンポジウムの折、ベルギーの台湾研究者アン・ヘイレン（Ann Heylen, 賀安娟）が、「台湾は常に朝鮮と比較しながら研究されるべきだ、その土台を築いたのはツルミだ」と語ったことがある。まったくの雑談だったが、筆者はこれを聞いて大いに共感した記憶がある。台湾と朝鮮の植民地教育を比較検討するには、ツルミの研究の批判的検討を避けて通るわけにはいかない⁽⁶⁾。

これまでに知られているツルミの主要業績には次のものがある。

E. Patricia Tsurumi, *Japanese Colonial*

(3) 呉の報告は、そのほか陳培豊の著書『「同化」の同床異夢』における分析概念の用法についての疑問や、台湾教育史研究における、植民地教育の「実際」と、その解放後への「影響」（特に「否定的連続性」）についての研究を提示している点でも興味深い。その検討は次の機会に譲りたい。

(4) 拙論『「同床異夢」としての植民地初等教育論——1920-1930年代朝鮮における民衆の教育要求とその解釈を中心に』、『東アジア研究』第41号、2005年3月。

(5) ①2000年11月のソウル大学のシンポジウムでの金基奭との英文共同報告、Ki-Seok Kim, and Seong-

Cheol Oh, *Japanese Colonial Education as a Contested Terrain. What Did Koreans Do in the Expansion of Elementary Schooling?*、②同年12月の東京学芸大学でのシンポジウムにおける、呉成哲「学校規律の植民地性と近代性——植民地朝鮮の普通学校を中心として1910~1945」（単独報告、ハングル、和訳付き）。

(6) なおツルミは最近台湾を訪れている（頼美鈴「欣晤鶴見教授小記」『台湾教育史研究会通讯』第三十八期、2005年4月）。

Education in Taiwan, 1895-1945, Harvard University Press, 1977. (以下本文では「主著」、注では Tsurumi, 1977 と略称)。この書は中国語に訳され、台湾で発行されているので、台湾の研究者にはよく知られているはずである⁽⁷⁾。

E. Patricia Tsurumi, *Colonial Education in Korea and Taiwan*, R. H. Meyers and M. R. Peattie(eds.) *The Japanese Colonial Empire, 1895-1945*, Princeton University Press, 1984. (以下本文では「1984年論文」、注では Tsurumi, 1984 と略称。この論文を含む著書の中国語訳はまだ刊行されていない⁽⁸⁾)。

ツルミの「主著」は、台湾と朝鮮の比較や、欧米諸国による植民地教育政策との比較にかなりの頁を割いており、植民地化以前の朝鮮王朝の特質や、日本人の中国文化と朝鮮文化に対する認識の違い、植民地化以後の社会の状況や欧米ミッション系教育機関の比重など幅広い視野で比較の枠組みを提供しているが、本質的には台湾教育史である。それに対して「1984年論文」は、わずか36頁の論文ながら、表題の示すように台湾と朝鮮の植民地教育の歴史を対等に、かつ対照的に描いている。両者に共通しているのは、日本の植民地教育は台湾では好意的に受容され、その結果台湾人は日本に対して好意的になったが、朝鮮では受容はされたものの、朝鮮人は教育を受けるほどむしろ日本に対する抵抗意識を強めた、ということである。その理由と

して、「主著」では教育そのものは基本的に同じと見てよいが、歴史的・社会的条件の違いから、台湾では日本に対して好意的に、朝鮮では反抗的になったとしている⁽⁹⁾。

今回のシンポジウムにおいて、呉成哲はツルミの「主著」の内容にはほとんど言及せず、その「評判」のみ挙げ、もっぱら「1984年」論文、特にその結論部分を引用して、ツルミを批判している。したがってまず、呉の批判の対象となった、ツルミの1984年論文の結論部分の要旨を以下に掲載して置こう。

1984年論文の結論部分要旨⁽¹⁰⁾ (下線部分は呉成哲報告での引用箇所。比較のため略さずに訳す。若干訳の違う箇所がある。)

台湾でも朝鮮でも教育政策は明治日本で極めてうまく機能した複線型教育制度を移植することを目指した。過去には文化を共有したが、近代への対応では台湾人や朝鮮人は日本人のように前向きでないと、教育もレベルを下げて与えられることになった。一部の有能なものには安全弁として中等以上の教育を用意する必要があったが、1919年の事件によって「同化」「日本化」政策は促進されることになり、初等教育は加速され、エリートのための「安全弁」も見かけ上は拡張されねばならなくなった。教育は総督府が主導するが、経費は人民が負担するという方式は、日本の国民教育でも起こったことだが、植民地では二つの重要な違いがあった。

(7) 日治時期台湾教育史 派翠西亞・鶴見(E. Patricia Tsurumi)著・林正芳訳、宜蘭市、仰山文教基金会、1999年。

(8) この他に、E. Patricia Tsurumi, *Factory Girls: Women in the Thread Mills of Meiji Japan*, Princeton University Press, 1992 が知られている。一貫して日本の植民地教育を研究してきたのではないようである。

(9) この箇所は『東アジア研究』第29号の拙論「日本の植民地歴史教科書に関する一考察」にその要旨を掲載しておいた。このツルミの見解は次のような関数で表

すことが出来よう。すなわち、ある植民地教育政策(X=独立変数)に対する被植民者の反応をY(従属変数)とする時、 $Y=f(X)$ という単純な一元的関数関係になるのではなく、その被植民地域の歴史的社会的状況Wを媒介変数とする、 $Y=f(X, W)$ で現される多元的複合的な関係になるということである。それに対して「1984年論文」では、基調は同じながらも朝鮮と台湾では日本の教育政策においても若干違いがあったことにも言及している。

(10) Tsurumi, 1984, pp.308-311. (私訳)

まず台湾人も朝鮮人も最初は日本の教育を望んだのではなく、選択の余地もなく握りこまれたのだということ。特に朝鮮では彼らの望んだものは片端から禁圧された。第二に植民地の日本人教育が常に優遇されたことである。中等・高等教育における差別は特に激しかった。

だがこうした不幸な事態にたいする朝鮮人と台湾人の反応は対照的だった。植民地期が終わるまでに、日本の教育を受けた（Japanese-educated）台湾の中上階層は日本的な趣向や価値の全体を吸収したが、朝鮮で同じ教育を受けた中上階層は戦國的民族主義に沸き立った。1919年の（の独立運動）はあからさまな反乱の不毛さについて貴重な教訓を彼ら（朝鮮人）に与えていたのだが、支配するものと支配されるものとの間の心理的なギャップは依然巨大だったのである。

朝鮮と台湾では教育政策の導入と遂行の仕方に若干違いがある。台湾では児玉・後藤時代から念入りに計画・経営され、台湾人教師の養成に多大な努力を払ったし、日本人教師と格差はあっても台湾人にとって教師はいい職業だった。だが朝鮮では保護国化前に近代教育が始まっていたので、植民者の手立ては限られていた。好ましくないと思った私立学校は弾圧したが、キリスト教系の学校には強硬路線は取れなかった。好ましくない教師の取り締まりに急で、朝鮮人教師の養成には熱心でなかった。農業や工業においても朝鮮では台湾よりも状況が悪く、給与格差も大きかった。

だが何よりも決定的なのはこういう違いである。台湾は大陸で食い詰めた移民の地であり、日本の領台後2年以内に希望者は大陸へ戻ることも出来た。この点で丸ごと植民地化された朝鮮はまったく違う。また中国史において異民族支配は例外でも恥辱でもないことを中上層の台湾人は知っていたし、裕福な台湾人には商人が多く、日本統治期にも利益を見出せたが、細か

く階層化された朝鮮社会では上層朝鮮人は日本の敵にならざるを得なかった。

しかも日本は近代ナショナリズムの運動が始まったその時期に朝鮮を植民地化した。どんなに「日本精神」を植えつけようとしても、教育が普及するほどナショナリズムのはびこるのを防げなかったのも道理である。日本の教育が普及するほど、朝鮮語の読み書き能力も高まり、日本の教育政策は成長しつつあった朝鮮人意識を留め得なかった。また朝鮮では日本は近代化の唯一のルートではありえなかった。台湾と違って、スポーツの導入や女性の地位向上の功績を朝鮮人によって讃えられるのは、日本人ではなく欧米の宣教師たちなのである。台湾人は通常植民地学校の不十分さや差別に対しては、より改善された類型の植民地教育体制を要求したが、朝鮮人はいつも独立を——しかも即時にすることを——望んでいた。

3. 呉成哲によるツルミ批判の論理

3-1. 「成功」「失敗」の対比を嫌う

上に挙げたツルミの1984年論文における、台湾と朝鮮の植民地化の比較対照を、呉成哲は台湾師大シンポジウムで「単純すぎる二分法的対比」として退けるとともに、台湾における日本文化への同化現象を「証拠不十分」として退けている。（ただし彼は、ツルミと同じ意見・判断と思われる点ではツルミに言及していないし、ツルミと事実認識の上で微妙に対立するのではないかとと思われる点にも触れていないが、これらの点は「残された課題」で述べよう。）

呉成哲のツルミ批判は駒込武を援用して行われている。駒込は「……朝鮮・台湾における統治体制の構想と実際の政策過程、諸民族の抵抗と協力の諸相に関しては、これまでもさまざまな論及がなされてきた。ただし、総じていえば、日本政府による植民地化以前の状況の相違、植民地時期の思想状況、経済状態などの違い、

脱植民地化以後の政治体制の問題、などに由来する複合的な条件の交錯を十分にふまえないまま、朝鮮支配の「失敗」と台湾支配の「成功」——この場合の「成功」「失敗」は、もちろん支配する側にとっての意味である——を単純に類型化した議論が少なからず見られる」と指摘している⁽¹¹⁾。呉成哲は、「この指摘は、例えばパトリシヤ ツルミの次のような主張の問題に対する批判ではないだろうか」として、「1984年論文」から次の箇所を例に挙げている。

植民地末期になって、植民地教育を経験した台湾の中上階層は日本的な趣向や価値の全体を受容した。朝鮮においては同一な階層は抵抗的な民族主義で騒然とした⁽¹²⁾。

この引用文について、呉は「日本的な趣味や態度の全体の受容」(absorbing a whole spectrum of Japanese tastes and attitudes)と言う評価が具体的にどんな証拠に基づいて、何を意味するのかは確実には提示されていない。ツルミの1977年の研究は台湾の植民地教育に対する総合的な研究として評価されているが、彼女の1984年の台湾と朝鮮に関する比較論文は単純すぎる二分法的対比に終始している。」と批判している。

さらに呉成哲は「例えば彼女は植民地教育に対する台湾人と朝鮮人の対応の違いを次のように対比している」として、ツルミの「1984年論文」の次の箇所を引用している。

台湾人は大体、植民地学校の不適當や差別に直面してより改善された類型の植民地

教育体制を要求した。反対に、朝鮮人はいつも即時の独立を望んでいた⁽¹³⁾。

これも先の引用箇所と同じく、前掲「1984年論文」の結論部分からの引用文であるが、これに対して呉は次のように批判する。

台湾人と朝鮮人との間に民族運動の様態や展開過程にある程度の違いはあるだろうが、この規定は台湾人の「同化」対朝鮮人の「抵抗」ひいては台湾における「成功」対朝鮮における「失敗」という二分法を強化する危険性があると思われる。何よりもこの規定は歴史的な事実に符合しない。せppかちな対比や評価を出す前に、台湾と朝鮮における植民地教育の具体的な展開やそれに対する被植民者の対応を緻密に明らかにする必要があるだろう。台湾のみならず朝鮮においても被植民者にとって植民地教育が持っている意味は複雑で微妙なものであったし、それぞれの被植民者が見せた教育的な対応も「同化」あるいは「抵抗」という二分法によって単純に規定されにくい側面を持っているはずだ。

上の「規定」という言い方はやや奇異な感があるが、これはツルミの叙述が決め付け的だといいたいのだろう。確かにこのツルミの叙述は「被植民者にとって植民地教育が持っている意味は複雑で微妙なものであった」ことを十分に配慮しているとはいいがたく、支配者側の立場からではないにせよ、あくまでも外から眺めたものになっていることに呉は不満なのだろう。

(11) 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』、岩波書店、1996年、76頁。

(12) Tsurumi, 1984, p. 309 (呉成哲訳)。なおツルミはこれに続けて、次のように書いている。呉の論文では引用されていないが、ここまで引用したほうがツルミの趣旨が分かりやすいと思われる。——「1919年の

(の独立運動)はあからさまな反乱の不毛さについて貴重な教訓を彼ら(朝鮮人)に与えていたのだが、支配するものと支配されるものとの間の心理的なギャップは依然巨大だったのである」。

(13) Tsurumi, 1984, p. 311 (呉成哲訳)

これを筆者なりに補足すれば、「被植民者というものは、もともと一方では宗主国を恐れ、他方ではこれを毛嫌いするようなアンビバレントな態度をとるものだ」というレオ・チンの指摘⁽¹⁴⁾が参考になると思う。これは解放された後も類似のことが言えるかもしれない。

兵の日は反日なれど短歌を詠む今は親日
の我の不思議さ 黄 得龍

という台湾歌人の歌は、単純に戦前=反日、戦後=親日ととるよりも、意識のされ方の違いはあれ、戦前にも戦後にも嫌日・好日入り混じった複雑な心情があったことを表した一例ととるほうが真実に近いかもしれない。また後藤新平が懸念したように、台湾においても教育の充実が台湾人の民族意識を高め、植民地支配への抵抗運動を助長した面があったのも事実である(ツルミは「主著」第8章でこの点を詳説している)。「相対的に」という限定をつけたとしても、朝鮮人は「反日的」、台湾人は「親日的」と単純に割り切れるものではない。植民地教育に対する朝鮮人と台湾人の反応には、さまざまな差はあるにしても、その内面を見れば、共通する部分が大いのではないかと考えられる。

ところで、呉は支配者側から見た「成功」「失敗」をさまざまな状況を無視して単純に類型化してはいけないという言辞をまず駒込から引き出して、それをツルミ批判に繋げているの

だが、この呉の見解が駒込のツルミ評価と直接つながるわけではない。駒込自身のツルミ評価としては、ツルミの「主著」について、「同書は、教育政策の全般にわたり平衡感覚の取れた目配りを行い、今日でも植民地期台湾教育史に関する、もっとも適切な通史としての地位を占めている。ただし、植民地教育政策を評価するうえでの基礎となる、Modernization と Japanization の概念そのものに対する批判的な検討が弱く、植民地支配の中でナショナリズムが自己矛盾を深める過程を明らかにする、という本書(駒込の書=引用者注)の課題意識とのあいだにはズレがある」⁽¹⁵⁾と述べている。この限りでは、駒込がツルミを「成功」・「失敗」の「単純な二分法」を採っていると見ているようには思えないが、これはあくまでツルミの「主著」に関する見解であり、「1984年論文」についてではない⁽¹⁶⁾。

今回の呉成哲のツルミ批判はもっぱら「1984年論文」によっており、「主著」については「ツルミの1977年の研究は台湾の植民地教育に対する総合的な研究として評価されている」と述べるのみである。ツルミの「主著」は朝鮮にも言及はしているが主体は台湾教育史であり、朝鮮と台湾とでの日本の植民地教育の受けとめられ方の違いを主として両者の歴史的社会的状況の違いに求めているのだから、呉が「主著」の内容に言及しなくても不思議ではないが、呉と駒込とでは、ツルミの評価に若干ズレがある

(14) Leo T. S. Ching, *Becoming Japanese, Colonial Taiwan and the Politics of Identity Formation*, University of California Press, 2001, p.5

(15) 駒込武前掲書、401頁。

(16) ツルミ自身は必ずしも単純に台湾は「成功」、朝鮮は「失敗」と言っているわけではないが、これまで日本の植民地統治の中で台湾は「成功」したとしばしば言われてきた。例えば矢内原忠雄は、台湾総督府の専制政治を容赦なく批判しながらも、「我台湾統治三十年、その治績は植民地経営の成功せる稀有模範として推賞せらる」と言い、その理由として、悪疫や悪習(阿片吸引)の流行の絶滅、「土匪」は「蕃人」の反乱

の鎮定、産業と教育の振興を挙げている。(矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』、『矢内原忠雄全集』第二巻、387頁)。また教育については、最近では伊藤潔が「日本の台湾統治の『遺産』はインフラ整備におけるソフト面としての教育であり、これなくしては台湾人の近代的な市民としての目覚めは、大幅に遅れたであろう。また、植民地統治下の台湾では、日本人官吏や警察官と比べ、概して教師は使命感が強く人格的にも優れ、敬愛と信頼を集めていた」と言っている。(伊藤潔『台湾——四百年の歴史と展望』、中公新書、1993年、117頁)。

ように思われる。

頁)

3-2. 「単純すぎる二分法的対比」批判

駒込の見解はさておき、ここでは呉が「(ツルミの) 1984年論文は単純すぎる二分法的対比に終止している」としている点を少し詳しく見よう。ツルミの「1984年論文」は、正味36頁余で、大略序論4頁、台湾15頁、朝鮮14頁、結論3頁からなっている。その中で「二分法的対比」に相当すると思われる部分は、結論の後半2頁ほどに過ぎない。序論はもちろん、主部に当たる朝鮮と台湾の植民地教育を叙述した部分は、比較を意識しているのではないかと思われるけれど、特に対比的に書かれているわけではない。論文の末尾に台湾と朝鮮を端的に対比した書き方になっている箇所があるのであって、ツルミの論文全体が「単純すぎる二分法的対比」に「終止している」かのようにいうのは、少なくとも形式的に見れば正確でない。また既に述べたように、呉はこの箇所以外のツルミの叙述の内容に全く触れていないし、引用もしていない。

呉はこれまでツルミにそれほど関心をもたなかったようである。2000年刊行の彼の著書『植民地初等教育の形成』の参考文献にツルミの名は見られない。しかしその直後、2001年11月のソウル・シンポジウムで金基奭と連名で行った報告には、次のようにツルミが引用されている⁽¹⁷⁾。

更に注目に値するのは、同じように日本に支配された台湾人と違って、日本の植民地教育制度によって教育された朝鮮人は、強力にナショナリズムを吹き込まれるようになり、制度によって中立化されたり洗脳されたりするよりむしろ制度に反抗さえしたことである(ツルミ、1977; 1984)。(2

ツルミ(1977; 1984)は、台湾と違って朝鮮では、教育を受けると人々はだんだんナショナリズムを広く深く撒き散らすようになっていくと指摘している。(30頁)

ここではツルミを批判するのではなく、むしろツルミを根拠にして議論を展開している。また「1984年論文」だけでなく、1977年の「主著」にも言及されており、しかも個々の箇所の引用ではなく、ツルミの判断を援用している。ここに援用されている箇所は、呉が今回の報告で「批判」した箇所と同一ではないが同趣旨であるといえよう。それが今回は「単純すぎる二分法的対比だ」「歴史的な事実と符合しない」「1919年以後の朝鮮の教育状況の変化を看過したもの」として否定されているのである。

もっともこのソウル・シンポジウムでの報告は金基奭との連名であるから、呉成哲一人の考えではないかもしれない。いずれにせよ呉は、以前からツルミの論考を考察してきたというより、今回朝鮮の植民地教育を台湾の場合と比較する必要から、始めて批判的に検討したように思われる。以下呉によって批判されているツルミの所説を筆者の立場から検討することにしたい。

3-3. 初等教育に焦点化した植民地教育観

呉成哲は台湾の中上層階層がいわば「日本化」したという証拠があるか、とツルミに迫っているのだが、報告論文で見ると、呉自身がそれを疑わせるような事実を示しているわけではない。また、ツルミの判断が疑わしいとしたら、議論にどういう影響が出てくるのかを示唆しているわけでもない。

(17)この論文(英文、私訳)の括弧内のツルミへの言及

は原文どおり。頁数は論文の頁。

ここで呉が批判した「植民地末期になって、植民地教育を経験した台湾の中上階層は日本的な趣向や価値の全体を受容した。朝鮮においては同一な階層は抵抗的な民族主義で騒然とした」というツルミの所説をもう一度ふり返ってみよう。確かにツルミの「1984年論文」の台湾教育の部分を読んでも、呉の求めるような「証拠」を「確実に提示」しているようには見えない。

しかもこの文章は、1977年のツルミの「主著」の第7章、“Japanese Education and Taiwanese Life”の中にある文章⁽¹⁸⁾と、末尾の僅かな語句を除いて、そっくり同じなのである。この第7章の後半には、台湾人と朝鮮人の植民地教育に対する反応の比較が出てくるのだが、この章の前半を丹念に読めば呉の求めるような「証拠」を見出せるかということ、実はそれもはっきり書かれているとはいえない。むしろ次の第8章、“Japanese Education, Taiwanese Intellectuals, and Political Activism”に、日本統治の末期には、中上層の台湾人が非常に日本化していて、ほとんど日本人と区別がつかなくなっていたという意味の記述がある。

同化政策がもっとも成功したと見られるのは、教育ピラミッドのトップにおいてだった。台湾人の医者、法律家、官吏、ジャーナリスト、都市の学校教師などは、農村の貧しい台湾人農民より、ライフスタイルや態度の点ではるかに日本人支配者と似ていた⁽¹⁹⁾。

この箇所は王育徳『台湾——苦悩するその歴

史』(弘文堂、1964年)などによっているのだが、ツルミはこの部分を「台湾の中上層階層は日本的な趣向や価値の全体を受容した」の前に出すべきではなかったか。ツルミ自身は台湾人の文化的日本人化を十分論証したつもりで1984年の論文の結論部分にも、「主著」の文章をそのまま利用したのかもしれないが、やや構成上不整合の印象を免れない。

しかも「主著」の結論部分では、日本の教育は大部分の台湾人、特に地方に住む人たちにとっては、伝統的生活様式が継続しており、アイデンティティにそれほど影響を与えていないのに対して、中上層階層の台湾人のアイデンティティはもっと複雑だ。彼らは少なくとも上飾りとしての日本化をしているが、それがどれだけ深いかは問題だ。しかも彼らの中には、温和な形であれ反体制運動の組織者も出てくるとツルミは言っているのである⁽²⁰⁾。

これでは中上層の台湾人が「日本的な趣味や価値の全体を受容」したと、一口に言いきれないのではないかという疑問が出て来る。ツルミの叙述の相互間に矛盾があるのではないか。さらに、台湾人が「日本的な趣味や価値」に対して、どのように主体的に対応したかが問題になるのではないか。少なくとも朝鮮人の「抵抗的な民族主義」と単純に対比できるようなことではないように思われる⁽²¹⁾。

さらに言うならば、「台湾の中上層階層」の日本文化受容と朝鮮の同じ階層の戦闘的な民族主義とを対比させること自体が、そもそも不適切なのではなからうか。日本文化をどのように受容したかということと、態度が親日的か反日的かということは、別の次元の問題ではなから

(18) Tsurumi, 1977, p.172.

(19) Tsurumi, 1977, p.177.

(20) Tsurumi, 1977, p.219.

(21) この第7章でツルミは、「戦闘的な民族主義」の例として1929年の「光州事件」を挙げている。呉の引用箇所に直ぐ続けて「1919年(の独立運動)はあからさ

まな反乱の不毛さについて貴重な教訓を彼ら(朝鮮人)に与えていたのだが、支配するものと支配されるものとの間の心理的なギャップは依然巨大だったのである」(私訳)と書いているのは、そういう事例をさすのであろう。

うか。ツルミのように表現すると、読者は朝鮮人が台湾人ほど日本文化を受容しなかったかのような印象を持つ可能性があるが、はたしてそうだろうか。ツルミとしては「朝鮮人は教育を受けると反日的になった」ということを指摘しているのだから、今更言わずとも自明のことと思っているのかもしれないが、「文化受容」と「日本に対する政治的姿勢」をそのように短絡してしまわないで、まず文化受容のレベルで朝鮮と台湾をもっと具体的に対比する必要があるのではないか。

ツルミは三一独立運動について、「日本の文化や価値を教え込むのが教育の目的だったのに、日本の植民地教育の受容は、必ずしもそういう結果をもたらさなかった」⁽²²⁾と書いているが、そうした状況は日本統治の末期の朝鮮になっても全く変わらなかったのだろうか。ツルミは朝鮮人の中上層階級の日本文化受容について直接には何も述べていない。一方、天皇を崇拝することよりは便所へ行ったら手を洗うことのほうが徹底した、と述べているように、言語や技術的文明は一応伝達できて、異質の「文化（文明に対する意味で＝引用者注）や価値」を教育することは台湾においても困難だったはずである。

さらに、被植民者というものは、もともと宗主国に対しては憧れと毛嫌い両様のアンビバレントな態度をとるものだ、という先のレオ・チンの指摘に従えば、朝鮮人と台湾人の日本文化に対する態度を、片方は憧れ、片方は嫌悪というように、単純に対比することは避けるべきだと言えよう。呉がツルミを「単純すぎる二分法的対比」と批判するのは、このような意味ではなからうか。

要するに、日本文化をどのように受容したか

と、日本に対してどういう態度をとったかとはあくまで別の問題と考えるべきだろう。ツルミは、文化史と政治史の二段構えで考察する必要があることを、一段階で対比してしまったところに問題があるのだと言えよう。

朝鮮人も台湾人に劣らず、ことによるとむしろそれ以上に、日本文化を受容していたかもしれない。台湾師大シンポジウムにおける、植民地教育の「否定的連続性」に関する呉の所論は、日本文化受容の実態と、その故に生じた今日までに至る問題の指摘にあると言ってよい。そして、それに深くかかわるのが就学率の問題である。

3-4. 初等教育の拡大——台湾と朝鮮ではどちらが普及したか

既に拙論で指摘したように、呉成哲は抗日か親日か、あるいは植民地主義か帝国主義かというような「二元的・規範的」、あるいは二項対立的な思考方法から脱しようという傾向が顕著である⁽²³⁾。民族主義者による「支配—抵抗」の二分法的歴史認識とは一線を画し、普通学校に対する朝鮮人の「教育熱」を、状況に対応する主体的な「教育行為」として捉えている。安秉植は「植民地経済の開発は、……植民地権力と日本資本だけで可能だったのではない。それは人口の97%を占める被植民地民である朝鮮人たちの植民地開発に対する積極的な対応がなければ不可能だった」⁽²⁴⁾としているが、呉成哲も全く同じような論理で、普通学校の拡充における朝鮮人たちの積極的な対応を論じている。呉が「成功」「失敗」のような単純な「二分法的対比」を嫌うのはそのためである。

呉成哲はツルミの「二分法的対比」について、「歴史的な事実に符合しない」「何よりも、……

(22) Tsurumi, 1984, p.302.

(23) 『『同床異夢』としての植民地初等教育論』『東アジア研究』第41号、4-5頁。

(24) 安秉植「キャッチ・アップ過程としての韓国経済成長史」『歴史学研究』No.802、青木書店、2005年6月、16頁

1919年以後の朝鮮の教育状況の変化を看過したものである。……台湾と朝鮮における植民地教育の具体的な展開過程やそれに対する被植民者の対応を緻密に明らかにする必要があるだろう」という。ここで呉成哲のいう「1919年以後の変化」とは、まさにこの「教育熱」——それまで低迷していた普通学校の就学率が急上昇したこと、普通学校の拡張要求が出てきたこと——を指していると思われる。実際、朝鮮総督府の初等教育の拡張は朝鮮人の教育拡張運動ぬきにはありえなかった⁽²⁵⁾。それは日本側の教育政策が一方的に「成功」したわけでもなければ、朝鮮人側の「親日」的行為でもない。それをツルミのように対比してしまうと、あたかも朝鮮人が日本の教育を積極的に受け入れようとしなかったかのように見られるおそれがある。それでは日本統治期の朝鮮教育にとってもっとも本質的な問題が抜け落ちてしまうと思われる。ツルミは朝鮮における普通学校の膨張を総督府の「拡張政策」にのみ求めており、民衆の教育要求——普通学校の拡張運動との関係まで論じていない。この点が朝鮮の初等教育の展開に対する、呉とツルミのもっとも基本的な認識の違いだろう。

もっともそのことが直ちに「朝鮮のエリート層は教育を受けるほど反日的になった」というツルミの判断を覆すものではないだろう。呉は初等教育を中心に論じているのに対して、ツルミはむしろ中等・高等教育を中心に論じている。さらに呉は「教育熱」の実態を具体的に明らかにしようとしているのに、ツルミはその結果ないし効果（「親日的」になったか、「反日的」になったか）を問題としており、両者の論点にはかなりずれがある。

しかしこの「論点の食い違い」は、呉の主要な関心からすれば、当面ほとんど問題にならない

いのではないか。それは呉にとっては、植民地教育の拡大がもたらした「同化＝日本化」の広さ・深さと、それが解放後に及ぼした影響の大きさこそが、究明すべきもっとも重要な課題になっていると思われるからである。「反日」とか「抗日」とか言う現象は事実あったにせよ、それ以上に重要なのは実際にどれぐらい（朝鮮人の「教育行為」として）植民地教育が受容されたのか、その実態をあきらかにすることのほうがまず重要だと、呉はいいたいのであろう。

一般に台湾のほうが朝鮮よりも日本統治期に教育が普及し、日本語も普及したように思われている。しかしその実態はどうなのだろうか。これが比較検討の際のもっとも基本的な問題であろう。

朝鮮の就学率には隠れた問題がある。「台湾の場合と異なり、朝鮮総督府は朝鮮人の就学率に関する統計を公表しなかった」として、呉は次のように指摘する。

仮にすべての志願者が入学したならば、普通学校の就学率は一層高くなったであろう。例えば1935年—40年まで志願者がすべて入学したら [1940年の] 普通学校の生徒数は2,225,233名になり、就学率は67.3%になると推測できる。（〔 〕内は引用者が補充）。

これは注目に値する。1940年の台湾の公学校就学率は61.56%とされているから、もし朝鮮で全入制をとっていけば、台湾よりも就学率が高かったことになる。筆者は拙論『『同床異夢』としての植民地初等教育論』で、「もし志願者が全員入学できていたら、ことによると朝鮮のほうが同時期の台湾より就学率が高くなっていただかもしれない」と指摘しておいた⁽²⁶⁾。これ

(25)これは今回の呉成哲報告の3. と4. に述べられていることだが、この点については前掲の拙論『『同床

異夢』としての植民地初等教育論』を参照されたい。
(26)前掲拙論、『東アジア研究』第41号、注27。

が呉成哲によって支持された形になっている。(ただしこれは、この時期の台湾に公学校入学抑制がなかったとした話である。実際には台湾にも入学抑制の事実があったことが知られている。この点は機会を改めて考察したい)。

4. 日本語教育の「成果」はどちらであがったのか

朝鮮と台湾の初等学校就学率が再検討を要するとすれば、日本語の普及率も再検討の必要が出てくるだろう。当時の朝鮮においては、普通学校を希望するくらいの子どもなら、入学以前に書堂で漢字を習うばかりでなく、初歩の日本語も親などから習っている場合が多いことが聞き取りなどから知られている⁽²⁷⁾。入学熱が高いということは、必然的に日本語の普及率も高いことを予想させる。初等教育に関する限り、きびしい入試などのなかった台湾よりも朝鮮のほうが日本語の普及率も高く当然のように思われる。植民地教育の直接の目標である国語(日本語)教育は、朝鮮と台湾のどちらでより「成果」があがったのだろうか？

一般には台湾のほうが朝鮮よりも日本語が普及したと思われる。統計的に見ても就学率や日本語普及率は、台湾のほうがはるかに高かったことになっている。それにもかかわらずこれと矛盾するような指摘が少なくない。

日本語を解する者の割合は台湾では1938年に41.90%、1941年に57.02%であり⁽²⁸⁾、日本統治の末期には70%とも80%とも言われている。一方朝鮮では1938年に12.38%、1943年になっても22.15%に過ぎないとされている⁽²⁹⁾。それにもかかわらず、実は朝鮮のほうが台湾よりも

「国語教育」において優れていたという指摘がある。それは同じ「国語教育」(日本語教育)でも、台湾では会話を重視していたのに対し、朝鮮では読みを重視したためである。こうした事情について、朝鮮慶尚南道の視学官であった末永又一は1931年に自著で、台湾の国語教育は実用性や会話にこだわり、「読み」の力が劣っているという。

確かに台湾では公学校の児童に常時日本語を使わせるように当局も学校も腐心している。台湾の公学校教師は朝鮮の普通学校のように国語教授に対訳法を使ったりしないし、公学校の子どもは普通学校の子どもと違って教師が見ていなくても「国語」で話している。だがそういう努力の割に、公学校の子どもの「国語力」は「微弱」に見える、朝鮮の普通学校の国語教育のほうがすぐれているとして、こう断じている。

一般的に論ずれば、我が普通学校の児童の国語力の遥によいものがあるやに思ふものである。……(台湾の国語教育は)会話教授の理論としては相当傾聴に値ひすべきものがあるがその実際は窮屈な形式規矩を与へるに過ぎざる状況にあると、国語教育の中心をなす読方教育が形式的素材吟味の域を出でざる……公学校の国語教育では到底我が普通学校の国語教育とは同日に論じられないのである⁽³⁰⁾。

これは末永の偏見とは言えないようである。末永の著書の出る2年前に、台湾総督府の視学官・土性善九郎も「読み方」の力が乏しいことを指摘して、「公学校の国語の実力は予想外に貧弱なものである」と憂慮していたからであ

(27) 拙論「朝鮮と台湾における民衆の教育意識をめぐって——聞き取り調査とその位置づけ——」『成城学園教育研究所年報第二十集』、1998年

(28) 台湾総督府『台湾の社会教育』(昭和十六年度版)

(29) 旗田巍編『日本は朝鮮で何を教えたか』あゆみ出版、1987年、92頁

(30) 末永又一『朝鮮から見た台湾の教育』1931年、114～117頁。

る⁽³¹⁾。

山口喜一郎が昭和14年に「朝鮮は台湾より十年遅れて日本語教育を始めたにもかかわらず、その進歩と普及の著しいことはまったく驚くばかり……」と述べているのは、こうした状況を反映しているのであろう⁽³²⁾。さらに会話についても、戦時下の台湾へ視察に来た人たちが「朝鮮では田舎の隅々まで、日本語で用事がすませられるが、台湾は少し田舎に行くとい向日語が通じない」と指摘している⁽³³⁾。一見まことにパラドキシカルな現象に見える。

これには統計が実態を反映していないのではないか、という疑いが当然出てくる。先に植民地になったことを意識して、台湾総督府が朝鮮に遅れまいとあせっていたということも言われている。戦後も日本語の残存使用現象が見られるなど、戦後台湾のほうが韓国・北朝鮮よりは一見「親日的」に見えることから、植民地時代にも台湾のほうが日本語が通じていたかのように思われやすいのである。(なお少数先住民への日本語普及過程は別個に考察せねばならないので今は省略する。)

5. 日本文化受容の一指標としての 日本語文芸活動

2005年6月のソウルでの首脳会谈で日本の小泉首相は、韓国の女性歌人・孫戸妍の詠んだ「切実な願いが吾れに一つあり争いのなき国と国なれ」という短歌を引いたと言う⁽³⁴⁾。孫戸妍は戦前日本に生まれ、戦後再び留学のため来日して短歌を学んだ。1980年までに『無窮花』『第二 無窮花』『第三 無窮花』の三冊の歌集を出している。

(31)土性善九郎「公学校児童の読み方の力と国語学習」『台湾教育』第三百十七、1929年。

(32)山口喜一郎「わが国の外地に於ける日本語教授の変遷」、『国語運動』1939年10月。

(33)驚巢敦哉『台湾保甲皇民化読本』1941年、185-186

朝鮮人や台湾人が「日本文化」の真髓を吸収したかどうかを判断する一つの指標として、短歌や俳句などの日本語文芸の普及をあげることができるだろう。現在台湾で日本語で詠まれる短歌や俳句がどのくらい盛んかということは、『台湾万葉集』や『台湾俳句歳時記』などで知られるとおりでである⁽³⁵⁾。しかし韓国や北朝鮮にそのような活動があるとは聞かない。孫戸妍はまことに稀少な例であろう。短歌や俳句などの日本語文芸が、特に皇民化期の台湾で盛んになったと言われるが、同時期の朝鮮ではどうだったのだろうか。

これを推定する一つのがかりになるだろうと思われるのは、植民地時代の台湾教育機関誌『台湾教育』や、朝鮮教育会の『文教の朝鮮』の文芸欄である。ここには読者から投稿された短歌や俳句、漢詩などが掲載されていた。日本人の教師が多かったが、台湾人や朝鮮人の教師たちも短歌や俳句を投稿していた。

『台湾教育』の文芸欄は「文苑」といい、主として漢詩・短歌・俳句からなっていた。漢詩は全期を通じて主として台湾人が投稿していた。短歌・俳句は最初のうち日本人だけが投稿していたが、昭和に入るところから徐々に台湾人の投稿も出てくる。しかしその増え方は緩慢である。

いっぽう『文教の朝鮮』の文芸欄は特定の名称がなかったが、主として短歌・俳句を載せていた(初期には一時期川柳も載せたが、漢文を載せたのは二回きりだった)。これを見ると、最初のうち朝鮮人の投稿はほとんどないが、昭和5年頃から多くなり、昭和7年末には、かなりの数に上っている。同時期の『台湾教育』の「文苑」欄に比べてむしろ盛況といえるくらいである。しかしこの文芸欄は昭和8年2月号以

頁。

(34)『朝日新聞』「天声人語」、2005年6月21日。

(35)拙稿「台湾日本語文芸の今を考える」『アジアフォーラム』28、2004年。

降突如廃止された（作品の公募を停止した）⁽³⁶⁾。これがそのまま続いていたら、昭和十年代には朝鮮人の投稿は、短歌・俳句とも飛躍的に発展していたのではないと思われる。皇民化期には短歌や俳句が朝鮮人の間に相当に普及していたのではなからうか。

植民地時代末期には「朝鮮文学は、文学者組織の専門作家の面からも作品活動の面からも日本の植民地文学に転落してしまいそうであった。詩人の中には、日本の和歌や俳句までたしなむ人々がいるほどであった」と池明観が述べているのは、こういう状況と関連があるのではなからうか⁽³⁷⁾。しかし彼は普通学校の教師のような一般の朝鮮人の日本語文芸活動については何も述べていない。いっぽう台湾では1940年代に入る頃になると短歌や俳句が一般人にかなり普及してきたが、専門作家は知られていない。神田喜一郎と島田謹二は次のように述べている。

…本島人も国語の実用的理解から一歩進めて今や味解の方へ入りかけてゐるともいはれる。それゆゑか、文学の方面でも、俳句や短歌のやうに、或意味で「日本的」といふべき洗練されたかなり特殊な心境を必要とする部門には、まだ本島人の優秀な作家はゐないけれど、新詩、特に小説のやうな比較的形式的約束のゆるやかな、いはば非伝統的な様式の文学には、内地にも名を知られた本島人作家を出しかけてゐるやうである⁽³⁸⁾。

これによると、小説など散文の台湾人作家は出てきたが、韻文の作家が出るにはもう少し時

間がかかる、と見られていたようである。つまり台湾人は俳句や短歌のような韻文の作家にはなかなかないということである。日本統治期の短歌や俳句の専門作家の出現は、ことによると朝鮮のほうが早かったのかもしれない。この実態については今後のさらなる解明を待ちたい。

戦後は台湾でも朝鮮でも日本語が否定ないし禁止された。しかし、台湾においては、母語の台湾語ではなく北京語が標準語として強制され、二二八事件以後の台湾人と国府との対立（いわゆる「第二の植民地化」）から、日本語が自発的に使用される現象を生み、これが短歌や俳句などの復活につながったのである。（孫戸妍は日本に留学しているが、台湾の歌人俳人はほとんど台湾内で教育を受けた人たちである）。これに対し、朝鮮では南北ともに母語朝鮮語一色になり、日本語文芸が生き延びるにはきわめてきびしい環境になった。戦後の韓国などで短歌や俳句が詠まれた事例はこれまでほとんど知られていない。現在の韓国や北朝鮮の対日感情などを考えても、それはきわめて想像しにくいことであろう。

しかしこういう戦後の状況を、日本統治期の状況にさかのぼってそのまま当てはめると、誤った先入観を生むおそれがある。現在よく知られていないだけで、台湾よりもむしろ朝鮮のほうが日本語文芸活動を含む日本化が本格的に進んでいたのかもしれない。それだけに、呉成哲という、植民地教育の「否定的連続性」の検討も重視されるのであろう。こういう視点から、台湾と朝鮮における植民地教育の普及の実態を、検討しなおす必要があるだろう。

(36)『文教の朝鮮』昭和8年1月号には、「本誌には法令の研究、教育思潮の紹介等時運に應ずる各欄の設置を要求せられ」ているため、紙数の関係上当分短歌や俳句の「募集を割愛する」という朝鮮教育会の「会告」が載せられている。

(37)池明観『韓国文化史』高麗書林、1979年、417頁。

(38)神田喜一郎・島田謹二「台湾に於ける文学について」『愛書』1941年5月、『日本統治期台湾文学文芸評論集』第三巻、緑陰書房、2001年、371頁。なお同書に収録されている『台湾文芸』2-2（2~24頁）には同趣旨の「台湾の文学的過現未」（島田謹二）が掲載されている。

6. 残された課題

呉成哲によって提起されたツルミの業績の批判的検討はこれで終わるわけではない。今回の報告で表向きには言及していないが、内容的に見てかわりがあるのではないと思われる点を指摘しておこう。

まず「台湾と朝鮮は植民地支配以前には共に中国中心の東アジア儒教文明圏に属されていた。だが、植民地化以前の状況や植民地領有の時点あるいは歴史的経緯の相違、被植民者の種族構成や経済状態、思想状況の相違など差異点も存在するはずだ」と呉は主張しているが、実はその差異点を1977年の時点で指摘したのがツルミの功績だったのではないと思われる。呉は自分が直接批判した箇所以外、ツルミに言及していないが、この点は今後検討されるべきだろう。

また呉は「朝鮮における近代教育と植民地教育の角逐：1905-1910」を論じる際に、朝鮮では「植民地教育以外に近代教育への他の選択が与えられる可能性」があったことを強調している。そして「例えば、朝鮮は日本を通して以外にミッションスクールを通して近代化へのルートを知っていた」、ということ台湾との違いとして主張している。しかしこれもツルミが「主著」で既に指摘したことであるし、「1984年論文」においても、ツルミはキリスト教宣教師による学校や民族主義者による私立学校、が統監府により敵視され、財政的な圧迫と教科書認定制度による教育課程の牽制を受けたが、書堂は「無害有益」として当分温存策をとったことなどについて論じている。また台湾と違って、朝鮮では中等学校以上では断然私立学校志向だったというツルミの指摘も重要だと思われる⁽³⁹⁾。

1919年の三一運動勃発後、普通学校に対する

朝鮮人の対応が「拒否」から「受容」に反転したということは、既に韓祐熙などの先行研究によって確かめられているが、朝鮮人は日本の教育を受けたからといって「親日的」になるとは限らない、という事実をそれまでに既知しており、三一運動はその事実を日本人に知らせたのだとツルミは言っている⁽⁴⁰⁾。これは呉と微妙に判断が食い違っている点である。そのような事実が当時朝鮮人社会にあったとしても、それは朝鮮人同士には分かっても日本人にはなかなか分からなかったかもしれないので、ツルミの指摘には説得力があるように思われる。果たしてツルミの言うことに根拠があるのかどうか。もしツルミが正しければ「教育熱」は既に潜在的には1910年代からありえたはずである。この点は、韓国の研究者に批判的に検討してほしいところである。

また駒込は、「ツルミが（主著214頁で）指摘しているように、台湾総督府の高等教育抑圧政策は、一九世紀のインドにおけるイギリスの行政官が、英語による高等教育によって、敵対的なインド人を大英帝国の熱烈なる支持者に変えようであろうと考えていたのとは、好対照をなしていた」という指摘をしている⁽⁴¹⁾これはむしろツルミの業績を評価したものと見られる。呉はこういう点には全く触れていないが、どう評価するかは別にして、ツルミの業績の総合的検討のためには、こういう点にも触れておくべきだろう。

植民地化に対して異なる人々は異なる反応をする。ツルミが朝鮮と台湾との比較に関心を持つのはそのためである。そこでツルミはむしろ両者の対照性を強調する結果となった。それに対して呉は両者にはもっと類似性ないし共通性があるはずだという点を強調している。

呉成哲は被植民者である朝鮮人や台湾人の能

(39) Tsurumi, 1984, p.305~306

(40) Tsurumi, 1984, pp.301-302. 前掲拙論注40参照。

(41) 駒込前掲書、50頁。

動的・主体的行為として植民地教育への「参加」を捉えることを求めている。「日本が、日本語が台湾で何をした」だけでなく、「台湾人はそれにどう対応したか」を含め考察する必要があるという。日本の植民地教育が台湾人へもたらした結果（consequences）や、台湾人の反応（responses）へのツルミの考察は、支配した日本の側からの一方的な制度史研究に比べれば、はるかに台湾人の立場を尊重したものだ。しかしそれはまだ第三者の立場から見たものではないか、台湾人の能動性・主体性を十分に認めたものになっていないのではない、という点で再検討の必要があるだろう。

最後に、呉成哲は今回の報告の結論で、「否定的連続性」の究明として植民地教育で形成された「規律」の後遺症を論じ、台湾との比較研究を呼びかけている。実はツルミも植民地教育と宗主国日本の教育との関連性と並んで、被植民者の身体と精神に及ぼした植民地化の影響に関心を抱いていたのである。心理的な面における植民地化の影響は多くの場合最も究明が困難

なものだが、その重要性は極めて大きい。それは植民者と被植民者の自己認識にかかわり、解放後の両者の関係、さらには他国との関係にも影響を及ぼすとツルミはいう⁽⁴²⁾。その意味で呉とツルミは関心を共有しているのである。しかしツルミは解放後の問題に言及しておきながら、実際の研究は1945年までに留まっている。これは残された最も大きな課題であろう。

以上、ツルミ批判に関する呉成哲の言説と、それに関連して考察されるべきいくつかの問題点の解明を試みた。これが台湾と朝鮮の植民地教育研究の新たな始点になることを期待したい。

本稿を執筆するに当たり、韓国の呉成哲（現在、ソウル教育大学）助教授には、ソウル・シンポジウム及び台湾師範大学シンポジウムにおける報告論文から引用することを快諾されたことを感謝したい。台湾・新竹教育大学の許佩賢助理教授には、資料の面で大変お世話になったことに対してお礼申し上げたい。なお本文中では敬称を一切省略したことをご了承いただきたい。

(42) Tsurumi, 1977, Preface

